

仏教経典——卓越した精神遺産

ドミニック・トロテイニヨン

現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、たぐいまれなる展示会を、この展示の規模にふさわしいユネスコという名高い会場で、私たちに提供してくださっています。実際、これまで一堂に会して展示されたことがほとんどなく、しかも初めてフランスで展示されるといふ展示品のクオリティーは、私たちに単なる好奇心を起させるだけではありません。多様性と、そして何より驚くべき多産性をもった作品を展示しようとの熱意に、私たちは敬意を表さずにはいられません。仏教経典は、人類の諸文化の発展において宗

教的な教えだけが果たせる格別の役割についての注目すべき事例となっています。仏教における経典は、なによりもまずインドの精神性を代表する「文学のジャンル」ですが、その特別の効用によって、広大なアジア大陸のほぼ全域に広まり、様々な文化の糧となることができました。そこで、経典はまったく独自の地位を得たのです。

本展では、素晴らしい写本や印刷された経典といった物質的なものだけでなく、仏教経典によって触発された信じられないほどの工芸的、芸術的、知的、精神

的な創作能力を鑑賞することができます。世界史における仏教經典の重要性は、単に經典にある精神的な教えが広まったというをはるかに超えているのです。

本展で私たちが、仏教が根付いた全地域からもたらされた写本の豊富さと多様性を見ることができるよう、仏教經典は、膨大な翻訳典籍、文字体系の発明、用語集の発展、言語の役割についての考察などの起源でもあり、さらに、印刷法の発展にも寄与し、經典を授かった全ての人々の芸術的なイマジネーションも育みました。このことは、一九八七年から世界遺産リストに登録されている遺跡「莫高窟」のフレスコ壁画の（本展での）壮大な再現によって分かりやすく説明されています。

經典が「物語」であった意味

本展が私たちに勧めるのは、經典を「見る」ということです。容器として、經典や写本を見るとともに、内容として、仏教圖像の起源になった物語や教えを見ることができません。しかし、ここで、經典を見ること

は必ずしもたやすいことではなく、知識のない見学者にとっては見えないままかもしれないという側面を指摘しておきたいと思います。

詩偈の形式あるいは散文的な物語形式など、内容を記憶するためにいかなる表現形式がとられていたとしても、仏教の教えの始まりは「ブツダの言葉」(buddhavacana)であり、それは、師ブツダによって「巧みに語られたこと」(sutasukā)であり、ブツダの教えの本質そのものを伝えているはずで。しかし、その本質とは、ブツダの言葉の厳密な意味での情報内容だけにあるとは限りません。おそらく、逆の場合もあるでしょう……。なぜなら、經典というこの独自の「文学的ジャンル」においては、どのような聴衆に向かって話しかけているのかなど、ブツダが話している状況が不可欠の情報となるからです。

実際、多くの場合、經典が物語であったのは、意味がないことではありませんでした。ある聴衆との出会い、そしてそれに続く対話の「シナリオ化」は——この典型的な様式化が、しばしばステレオタイプ化され、

No Image

古ウイグル語訳『法華経』「観世音菩薩普門品」写本（9世紀の書写）。ウイグル文字。
348×29.2 cm。紙本。巻本。古ウイグル語はウイグル族が使用したトルコ語系言語

ときに極度に単純化されているとしても——「本筋とは関係のない話を並べた」逸話的なものではありません。また、シナリオ化は、ブツダの教えの基本の一つである「あらゆる現象は何らかの条件（縁）によって生じる」（「縁起」を教えるのに適しています。ブツダは、あらゆる時代、あらゆる場所で有効であるような理論を話したのではなく、常に、ある特定の状況で、一人または数人の聴衆に話しかけました。ブツダの言葉は、そこにいる相手に対し、その状況の中で、話した瞬間に効果がありました。

それは、今のベナレス近郊でブツダが初めて説法した時から変わりませんでした。ブツダが、苦行を止めるよう五人の苦行仲間を勧めたことを思い起こせば、その折の話の主要なテーマが特に苦行に関しての「苦（*dukkha*）」であったことには特別な意味があります。そして、そのときの説法は、ふつう「初転法輪」と呼ばれています。なぜなら、それがブツダの初の公開説法であったからというよりも、むしろ、そのときの聴衆が、ブツダのおかげで一人また一人と「法眼を開いた」、す

なわち真実があるがまに見るヴィジョンを知ったからです。これが、明らかにされた「ブツダの言葉」の効力であり、直ちに結果が出るという特長です。

したがって、經典の物語的な側面とは、仏教の教えをより快適に楽々と発見することを目的とした文学的手法なのではなく、教えそれ自体の本質的な構成要素なのです。聴衆は、なるべく登場人物と同じ体験ができるよう、登場人物になりきり、その人物の立場に実際に身を置くように導かれます。

「説法者」(bhāṅika) について述べましょう。このような各状況での教えを記憶することに専念した「説法者」は、ただ教えを保持するだけではなく、さらに、自分が伝える番になったとき、どのような聴衆に、どのような状況において、教えを伝えるかを指示します。また、弟子の進歩に応じて、ふさわしい「巧みに語られたブツダの言葉」を選ぶことも、師であり教育者でもある説法者の役目です。弟子は、宗教的修行をしなから暗唱できるように、その言葉を暗記します。こう

して、弟子もまた、物語が語る内面的な変革を体験できるようになるのです。

このような經典の「効能的」側面については、ふうほとんど言及されることがありません。しかしながら、この側面こそが、数世紀の間、これらの教えの幾つかが基本的には「文学として」——定説とは反対ですが——発展した経緯を説明できるかもしれません。西暦の初め頃、仏道を歩んでいくために「大乘」を採用することを強く勧めたマハーヤーナ (Mahāyāna) という思潮は、殊に、「經典」の独特な使用方法によって特徴づけられています。もちろん、大乘がその独自の教えを広めるために、仏教徒が頻繁に使うようになっていた文字を大いに活用したことに疑いの余地はありません。しかしながら、往々にして巨大なスケールをもつ大乘のテキストとは、なによりもまず「経 (sūtra)」であり、すなわち「物語」であったということが忘れられています。すなわち、それらの物語の並外れた展開にも、その「巨大な」あるいは「無限の」スケールにも、しかるべき役割があったはずなのです。仏教の創始者

であるブツダと同じく、仏教徒は常に何にもまして実効性を求めたのですから！

本展で中心的立場を正当にも占めている法華経は、その良き例です。法華経二十八品を通して、「これまで知られていなかった教えが、聴衆に對し明らかにされる」ということが、絶えず言われつづけます。諸菩薩のけた外れの大結集についての記述、驚くべき物語と数々の譬喩……。しかし、本当に新しい教えが明らかにされているようには見えません。ということは、「物語を聞くこと」と物語の「並外れた」性質それ自体が、聴衆が誘^{いざな}われている新たな体験なのではないのでしょうか？ これまでまったく聞いたこともない物語が語られることによって、私たちは、実相のもう一つ別の次元へと近づいていけるのではないのでしょうか？

経典は「ブツダ」その人を体現

ブツダの教えを保持し、また広めるために、「書く」という形式が最終的に採用されたにしても、「経」は、まずなにより話し聞かせるための言葉であり、その言

葉によって、聴衆は回心し、悟りに至ることさえできるのです。口伝の優位性は、仏教の教え自体の伝播において常に重要です。それを納得するには、ビルマのラングーンで一九五六年にパーリ語聖典が最新版に改訂された際、文字で書かれた文章が口伝の内容によって改訂され、その逆ではなかったということを思い出すだけで十分です。

「経」を語り、聞くということは、それ自体、一つの宗教実践です。したがって、仏教徒たちが彼らの物語や教えに、経典という物質化の形を最終的に与えたことは、矛盾しているように思えるかもしれませんが。私たちは「言葉は消えてしまいが、書いたものは残る」として、いとも安易に、書かれたもののほうを重視してしまいます。ですから、言い伝えられてきた教えを書きとめることによって教えの保持と宣布が容易になるのは当然であるように思うのです。そして、まさにこの「教えを伝持したい」との思いから、西暦の初め頃、スリランカのシンハラ人たちは、書き残すことを始めたわけ⁽¹⁾です。

とはいえ、その千年後でさえ、全ての仏教コミュニティが「口承」から「書き残す」ことに転向したわけではなかったのです。中国人の巡礼者たちは、中国文化にとっては大変貴重な「書物」を持ち帰るためにインドまで危険な旅をしたわけですが、「口伝の優位が見られるという」この事実について彼らが不平を書き残しているのがその証拠です。

教えを形あるものとして具象化することは、他の目的にも応えることになりました。それは、仏教においては、しばしば「聞かせること」と「見せること」が接近しているからこそ追求できる目的です。すなわち、ブッダその人を見るだけで聴衆が深く感動したのと同様のことを、今度はブッダが聴衆に語った言葉が、同じ特別なやり方で果たすのです。この方法において、「ブッダの言葉」に備わっている特別な力は、ほとんど必然的に、その物質的な形（経典）にも備わっているわけです。ブッダ自身が「私を見る者は、法（Dharma）を見る²」と言わなかったでしょうか?! しかも、インドの古い伝統においては、教えが書かれたものの集成は、

ブッダの「法身」(dharma-kaya)であるともみなされ、それ自体、初めは耳に聞こえる言葉として現れ、その後、触れたり見たりできる形が与えられます。このようにして、「書物」としての「経」は、「ブッダの言葉」がもつ、変容させる力³を目に見えるようにするだけでなく、実際の効果をあげるものにするのです。ブッダが荼毘にふされた後、その体から「仏舍利」が遺されました。同様に、写本や印刷された経典は、ストゥーパ（仏塔）や仏像といった聖なる容器の中の仏舎利の位置を占めるようになります。そこで、全ての仏教徒にとって、ブッダの教えを収めた経典は、ありふれたゴミとして捨てられなくなり、荼毘にふすごとく焼納するほかなくなったのです。

したがって、仏教経典を崇拜対象にすることは、（ユダヤ教・キリスト教・イスラームという）「啓典宗教」における聖なる書物への崇拜とはまったく似ていません。仏教の聖典とは、単に仏教の教えを保存するものというだけでなく、それ自体が「ブッダ」と「ブッダの言葉」を体現しているものなのです。

同様に、図像としてのブツダのイメージも無限に増大しました。テキストを含む全ての崇拜対象のこうした増大は、教えの内容を確実に宣布することだけを目的とはしていません。仏弟子にとって、このようなものを増やすことは、個人的にも、また全人類にとっても、それ自体が、「功德 (punya)」をもたらす「称賛に値する」

No Image

西夏語訳『法華経』の木版折本（11世紀の開版）。西夏文字。26.5×10.5cm。紙本。ロシア・東洋古文書研究所所蔵。西夏語は11-13世紀に中国北西部にあった西夏国（正式国号は大夏）で使用された言語

行為なのです。そのうえ、多くの大乘経典では、経典を多く書写した者を称賛し、その抜粋あるいは経題だけを書写した者でさえ讃えられています……。それは、「ブツダの言葉」とみなされている他の全てのテキストについても同様です。例えば、石に描かれたり刻まれたマントラ（真言）、ヒマラヤの峠や記念建造物で旅人が目にする数多くの「風馬旗」⁽³⁾——祈禱旗とも呼ばれます——なども、「ブツダの言葉」の無数にある物質化の形なのです。

一神教を「啓典の宗教」と呼ぶならば、仏教は「書庫の宗教」と呼べるでしょう！ どれほど多くの仏教僧院が、手書き写本や経典で埋め尽くされた巨大な本棚を有していることでしょうか。たとえまったく読まれることがないにしても……。ついには、このような「ブツダの言葉」を物質的に増やして功德を得ること自体が目的となっていました。例えば、写本を書写し、経典を印刷する、あるいは、より簡単にその実現のための費用を提供すること。これらは、物質的な存在としての経を広めるために何らかの役割を果たすことに

なります。このことによつて、なぜ仏教徒が、当初から木版や印刷などテキストの複製法の発展にも熱心に従事してきたのが明快に説明されます。

日常を超えた「もう一つの」次元を体験

さらに、経典その他の多くの仏教の教え——ブツダの様々な前世を語る「本生譚」(ジャータカ)も、もちろんその一つです——がもつ物語体という卓越した性質が、登場人物や出来事を言葉だけでなく図像によつても表すという、もう一つの「物質化の形」に至つたのも自然なことでした。言うまでもなく、こうした「図像で表現したい」という興趣を正当化できるのは、テキストに含まれる精神的メッセージ(を伝えようという意思)だけなのですが、そうは言うものの、単なる挿話や「絵になる」場面も、図像にしたい気を起こさせる力を失つてはいないようです。仏教の図像の豊かさは、聖なる石窟においては特に目を引くものであり、そこを訪れた人をして、あらゆる点で日常的な現実を突き抜けた次元にまで入り込ませます。

ここでは、精神的体験に図像化された信仰の枠組みを与えることだけが問題なのではなく、「もう一つ」の現実の中に信仰者を入り込ませることが、それ以上に重要なのです。それは、図像化された教えをその場で聞いたかのような精神的体験を生み出すための入門儀礼、イニシエーションのようなものです。

実際、仏教の聖地はどこでも、独特のめまいを起させます！ ここにもまた、「ブツダとその言葉を可視化する」実例があります。その表現形式は無限です。「千仏化現」⁽⁴⁾のような描写は、特に重要な意味をもっている一例です。つまり、これは歴史上のブツダが舎衛城(スラヴァスティ, Sāvatthī)の街で、彼が討論したばかりの中傷者たちの大半を黙らせたという「奇跡」を思い起こさせるだけではなく、ブツダがその身を様々な形で示すことで、大乘仏教が大変に重視する教えの核心を目に見えるものにするのです。すなわち、ブツダは他の現象と同じく——いな、それ以上に——実体をもたない「空」なる存在であるゆえに、ありとあらゆる数えきれない多様な姿で自らを示せるのだというわけ

です！

したがって、西洋人見学者たちに対しては、いくら注意してもしすぎることはないでしょう。「いつまでも繰り返されるブッダの変容の大群に直面し、それらがまったく同じか、ほとんど何も変わらないように見えて、理解しがたいと思うようになるでしょう」と。西洋人はまた、ブッダの教えの内容に知的なアプローチをすることだけを重視し執着するあまり、単なる本であるうと、仏教的な「もの」に備わっている物質的側面や実体験と真にかかわる側面を忘れる恐れがあります。ここでの豊かさや多様性を生んだものは、「徳行を積む」ことについてよく言われることです。食料品屋がストックを貯蓄するように、後で利益にあずかることを期待して作品の数を誇るような月並みの儀礼主義ではありません。うそいつわりのない心からの精神性が働いた結果なのです。

仏弟子たちは、ブッダとブッダの言葉を、見えるもの、聞こえるもの、触れられるもの、容易に「向き合える」ものにする事によって、日常の環境それ自体が急激

に変化し、今まで聞いたことも見たこともなく、未知であった「もう一つの」現実を直接体験できる状況になるように行動します。ここに展示されている仏教経典が、歴史的、文化的、芸術的関心呼び、工芸的興味さえ引くであろうことは間違いありません。しかし、そこにとどまらず、「ひとつの経典というものが、ある人々にとっては単なる物体以上のものとなり得るのであり、経典の存在そのものが、知的理解の対象である経典内容と同等の価値をもっている」ことを、訪れる人々に分からせてくれるでしょう。

〔 〕内は邦訳に際しての補注

訳注

(1) 紀元前一世紀、スリランカで大飢饉が続き、僧も次々と餓死し、教団も滅亡の瀬戸際に立った。このままでは口伝の伝承者とともに仏教そのものも亡びてしまうという危機感から、教えの書写が始まったという伝承がある。こうして、シンハラ文字によるパーリ語仏典が生まれたとされる。

(2) 「法を見る者は我を見る。我を見る者は法を見る」(サンユッタ・ニカーヤ)相応部経典22:87。『南伝大藏経』第十四巻、一九〇頁)など。

(3) 「風馬旗」(ルンタ、タルチヨ)は、チベットの民間信仰から生まれた、伝統的な五色(五大を表す)の祈禱旗の中央に、馬の絵が描かれているもの。風のように、駆ける馬のように、早く願いがかない、また仏教が広まるようにとの祈りが込められている。

(4) 舍衛城(大国コーサラ国の首都)で、異教の指導者たちから神通力を示すよう求められたブツダは、衆人環視のなか、様々な神変を現した。その一つが「千仏化現」。次から次に無数の蓮華が現れ、どの蓮華にもブツダが座していたという奇跡であり、多くの仏画や仏教彫刻の主題となった。

Dominique Trotignon / パリの仏教学研究所 (Institut d'Études Bouddhiques) 所長、テラワワダ仏教協会「ヴィヴェーカーラーマ」(Association Bouddhique Theravāda & Vivekārama) 名誉会長。インドの古代仏教と東南アジアのテラワワダ仏教の統合と考察、またフランスにおける仏教の確立に努める。共著に『死とは終わりのことなのか? (La mort est-elle une fin?)』(2009年)があり、『宗教は発言する (Ce qu'en disent les religions)』誌には、「女性と宗教」(2002年)、「世界の創造」(2004年)のテーマの際に寄稿している。